

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

エゴイズムと自己表現(覚え書き) : 人と自然と社会のキャリアデザイン・生涯学習の視点から

著者	笹川 孝一
出版者	法政大学資格課程
雑誌名	法政大学資格課程年報
巻	5
ページ	15-20
発行年	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/13450

エゴイズムと自己表現（覚え書き）

一人と自然と社会のキャリアデザイン・生涯学習の視点から

法政大学キャリアデザイン学部教授 笹川孝一

1. 「エゴイズム」の否定と肯定のはざまで悩む人々

(1) 『「エゴイズム」ってなんかよくないみたい」

というイメージ

法政大学における「生涯学習入門」（「発達・教育キャリア入門」）や「現代社会と社会教育」などの授業を30年近く行ってきて、学生たちが思い悩んでいる言葉がいくつかあることに気づいた。たとえば、「個性」「夢」「自立」そして「エゴイズム」である。

これらの言葉に、学生たちはなぜ思い悩んでいるのだろうか？その理由は次の点にあると思われる。①これらが近代以後の社会におけるキーワードであること。②それにもかかわらず、それらに対するきちんとした定義が与えられていないこと。③その結果、「世間」で流布されるままに、「身につけなければならないこと」、あるいは、「排除しなければならないこと」と思い込まされていること。④そしてその思い込みは、多分に、永年のイデオロギー政策（思想や観念についての政策）や耳触りの良い言葉を流布して商品売り込もうとする商業主義などによる一種の世論操作の結果であること。

たとえば、「個性」は普遍性と特殊性とのせめぎ合いの結果、普遍性に裏打ちされた特殊性、あるいは特殊性を貫く普遍性（ヘーゲル）である。だから、個性というものは、少なくとも30年以上生きてきた人間が、自分を振り返りつつ「これが自分の個性かな？」と思うものである。それは、『論語』における「30にして立つ」（「而立」）、「40にして惑わず」（「不惑」）、「50にして天命を知る」（「知天命」）、「60にして耳順う」（「耳順」）などとしても表現されてきた。

だから、「我十有五にして学に志す」（「志学」）から而立までの若者は、自分の個性の形成過程にあるので、自分の個性を意識することはあるとしても、「自分の個性は何だろう」「自分には個性はないのではないか」などと思い悩んで、懸命に「特殊性探し」を行う必要はない。そんなことをしていたら、それで裏打ちすべき普遍性、社会における標準的な表現能力を習得することが疎かになる。一方、「受験勉強」に象徴される「普遍的能力」習得ばかりに迫りまくられていると、裏打ちされるべき特殊性が弱くなる。そして、自立→不惑→知天命→耳順…と続く、個性開化の時期に、「ソツは

ないがつまらない人」「ただの変人」になってしまう。

少なくとも、15～30歳の若者は、自分の「個性」の現状について思い悩む必要はない。「個性」を問題にするよりも、①社会における標準的な仕事や遊び、折りや学びの技、知識、智慧を習得することと、②自分が好きなことに邁進すること、③この両方をしっかり行うことに集中した方がよい。この両立は、簡単でない。自分の特殊性の展開と普遍性の習得のはざまで引き裂かれ、切り刻まれる。だから、若者の時代は、良くも悪くも揺れ動く。揺れ動くので、不安定になり、感受性が強くなり、いろんなものを感じ取れる。この、個性形成荒波で揉まれることは若者の宿命である。それゆえに、様々な大人たちを批判的なモデルとして、これは取り込もう、これは引き継がない、などという「反抗期」が必要だし、嵐の時代を共に語り合うことが必要である。

(2) 「エゴ」イズムは自分を軸に世界を捉える認識と行動の方法

そこで改めて、「エゴイズム」が、自分を軸に捉える認識、行動の方法であることを思い起こす必要がある。「エゴ」とはラテン語で「私」を指す言葉である。だからエゴイズムとは、「私主義」つまり私を軸に物事や世界を捉える認識と行動の方法である。

しかし、「私を軸にする」とは私しか見ないとか、私の事しか考えないということではない。私という身体、私という主観を潜って、物事、世界を捉えていくということである。言い換えれば、私を潜らせないで、「受け売り」はしないということである。

(3) 世界を軸に自分を捉える認識・行動方法としての「ソシオ」イズムと一体のエゴイズム

これと対を成すのは、「ソシオ」＝社会、共同体主義である。これは社会や共同体を軸に私を捉える認識と行動の方法である。そしてこれも、私を無視して、「社会」や「共同体」だけを一方的に強調するのではない。社会や共同体の視点から、言いかえると、他の人やシステムの点から私を見る、私だけに眼を狭めないということである。

(4)「エゴイズム」否定による心理的、社会的病理現象

だから、エゴイズムとソシオイズムとは、両方必要である。この両方があることで物事は良く見え、バランスがとれる。それにもかかわらず、エゴイズムを否定して、「社会」や「世の中」だけを強調すると、物事は良く見えなくなる。現代社会で一人の人間として、進路、職業、恋愛、家族、財産管理など様々なことを自分で選ぶのに、自分を軸に、自分に即してものごとを捉えなければ、結局自分の利害は守れない。自分としての一貫した行動ができない。

エゴイズムを否定されると、利害が内攻する。表面的にはおおらかな人だが、陰では利に聡い人になる。表向きはやさしくて、裏でいじめる人になる。そういう人や雰囲気社会に広がると、生きにくい世の中となる。苛め・虐待が、家庭でも、地域でも、学校でも、NPOでも、国際社会でも横行する。そして苛めをする人もされる人も、精神的に病んでいく。

とくに、商品経済の発展を基礎に契約関係が広がって、一人ひとりが自分自身の社会の主権者であり、自分自身の生活の主人公、自己決定権限者である時に、「私・主義」と「社会・主義」のそれぞれとそのバランスを志向する発想や考え方、行動を否定され、制限されると、病理現象はひどくなる。自殺、通り魔犯罪、いじめ、ブラック企業、ブラックバイト、サービス残業、障害者差別、ヘイトスピーチ、人種・民族差別、性差別、発展途上国差別などは、みな、エゴイズムとソシオイズムをされた結果に起こる歪みであり、病理である。

この解決に必要なことの1つは、エゴイズムが否定されたり、社会的に開放されたりしてきた歴史を知ることである。そして、もう1つは、エゴイズムを社会的に開放していくための「自己表現方法」を知り、実行していくことである。

現代のキャリアデザイン、生涯学習・教育は、このエゴイズムの社会的開放、エゴイズムとソシオイズムの両立の能力を身につけ、実行していくことにその核心があると言っても、言い過ぎではない。

2.「エゴ」イズム成立の歴史的背景

(1)地中海を中心とする商業貿易と「個人」の活躍

エゴイズムの社会的背景は商業の発展とそれに基づく契約社会の展開である。商業が正常に成立するためには、売り手と買い手が対等であり、契約の交渉、締結、実行が事実に基づいて、公正かつ誠実に行われなければならない。そうでなければ、商業は持続しない。そのような社会を背景に、ルネサンスにおける「個人」の活躍の時代が生まれた。

ところがヨーロッパの場合、4世紀以後ローマ帝国の国教となってそれ以後ヨーロッパ世界を精神的に支配したローマ法王庁が、その特権を守るために、自分たちにとって不都合な事実を認めようとせず、それに

従わない者を異端審問にかけたり、火あぶりにしたりした。

(2)地動説とエゴイズム

とくに航海術や天文学の発展に伴って、次第に大地が地球であり、太陽が地球の周りを周るのでなく、地球が太陽の周りを自転しながら公転していることが解ってきた。それはローマ法王庁が認めない説であるが、天文学者たちは、自己の良心、学問的信念にかけてその説を主張した。これら、法王庁と異なる学問的見解を問題視されて、ガリレオ・ガリレイも裁判にかけられ、ジョルダーノ・ブルーノは火刑に処せられた。

エゴイズムが先鋭な社会的、歴史的、学問的問題となったのである。

(3)ルネ・デカルトの役割

この中で、ルネ・デカルトが、有名な「われ思う、故に我あり」(エゴ・コギト・エルゴ・スム)と唱えた、とされる。その意味は、造物主＝「神」が人間を作ったのだから、人間は元々、造物主を尊敬するという特性を持っている。しかし、しばしばローマ法王庁が神の代理人として、必ずしも真実とは限らないことを人々に押し付ける。だから人間は神の意向を直接的に知る必要がある。では、どのようにしてそれは可能となるのか？それは、私たち一人ひとりが、自分たちの感性を基礎としてものごとを認識し、同時にそれに分析を加えて、それが真実であるかどうか、自ら検証することによってである。この時、「私が感じ考える」ことが、物事の出発点となる。そのようにして、私たちは神の意向である世界の秩序や仕組み、自分たち自身、社会のあるべき姿を捉えることができるのである。

(4)エゴイズムと社会改革との一体性

～カント、ヘーゲル、マルクス～

その後のイギリスやアメリカやフランスの市民革命を通じて、私の認識能力を信頼して世界を観察し、世界に働きかけていく中で、私や私たちを創りだし、全ての人のエゴイズムを社会的に開放する道が探求された。

それらは、カントのいわゆる三批判やヘーゲルの『精神の現象学』、マルクスの『経済学批判要綱』『資本論』、ベンジャミン・フランクリンの『フランクリン自伝』などに示された。

3. 東アジアと日本の場合

(1)『大学』における「修身」の位置と

「宋学」の歴史的背景

東アジアでは、南宋の時代に朱子によって集大成されたという「宋学」「朱子学」のなかに、このエゴイズムとソシオイズムとの調和の道が示されている。すな

わち、朱子が編集した『大学』において「八条目」が示された。そこでは、「正心」「誠意」「格物」「致知」という内面、認識や判断基準に関わる4項目がある。

他方、「齊家」「治国」「平天下」という家族やビジネス、国家経営や世界平和という社会のマネジメントに関わる3項目がある。その二つのカテゴリーを「修身」すなわち、宇宙と人間の摂理に従って人としての生き方を実践し自分自身を磨いていくことが、つないでいるのである。ここでは、一方では社会が大切なのであるが、もう一方では自分自身の良心や実際に行ってみて心理を見出していき、正しい認識方法も重要とされている。

(2) 明清のエゴイズム否定と朝鮮朱子学

このような朱子学ではあったが、朱子学には別の側面もあった。その1つは、インド仏教を取り入れた死生観、宇宙観であり、他の1つは、皇帝を頂点とする中央集権的な身分秩序社会である。この身分制社会の部分に光を当てて国教としたのが朝鮮国だったが、徳川家康らは社会の安定のために、中央集権的秩序を創ろうと、朝鮮朱子学を幕府の「正学」とし、他の儒学の解釈を「異学」として、しばしば「異学の禁」を命じた。

もちろん朱子の八条目は否定しなかったが、「修身」の内容が身分制的なものに傾くこととなった。

(3) ルイス・フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』における女性たちの自由な振る舞い

フランシスコ・ザビエルの弟子であるルイスフロイスが著した『ヨーロッパ文化と日本文化』(岩波文庫)には、徳川時代以前、信長や秀吉の時代の日本の自由な風俗が描かれている。とくに女性が自由に外出したり、男が厨房に入ったりする習慣などに注目して、スペインとは正反対だと、目を見張っている。だが、これらの風習は、「士農工商」「君臣の秩序」「長幼の序」「男女の別」によって、影を潜めて行く。とくに、貝原益軒『和俗童子訓』の「女子を教ゆる法」には「三従」「七去」という女性を男に縛り付け従属させることが、当然の教育方法として描かれている。エゴイズムを徹底的に抑圧した、一方的な社会規範の押しつけであり、そのために御殿の奥女中の中での苛めなどがひどくなったとされる。

(4) 江戸幕府の正統派朱子学における

「分」「職分」と「分限」によるエゴイズムの否定

この身分制を支える理論的装置が「分」「職分」「分限」であった。

「分」とはそれぞれの人、あるいは民には守るべき権限の範囲がある。まず、「人」とは統治する武士や公家、皇族たちで、農工商の「三民」は「民」すなわち統治

される立場のものであった。その上で、主人には主人の、家来、使用人には使用人の、男には男の、女には女の「分」があるとされた。これが、「身分」である。

そして、それぞれが行うべき社会的責務が「職分」である。それぞれの身分のものはその職分を全うすべきで、その境界を踏み越えてはならないという、境界が「分限」である。「三従」「七去」などの「従う」が女の身分、職分、分限なのであった。

このような理論装置の下で、それぞれのエゴイズムは徳川幕藩体制の綱目のような「身分秩序」の範囲に押し込められることとなった。

4. エゴイズムの社会的開放の道

(1) 明治期前後の日本とエゴイズムの解放

ところが、江戸幕府は一方では農業だけでなく、工業や商業も奨励した。とくに参勤交代は江戸と各地を結ぶ人やもの、金の流通を促進し、各藩で特産物を作り出すことが盛んになった。すると、幕府の決めた通りの「分」「職分」「分限」を守るだけでは、現実に対応できなくなった。明治の産業の父とも言われる渋沢栄一は埼玉の豪農の出身だったが、金融業・両替商も営み、大名にも貸し付ける「大名貸し」も行っていた。そして、武士身分も事実上買って、最後の將軍徳川慶喜の家臣となった。

これは、エゴイズムの社会的開放の一形態だったと言える。

また、九州中津藩の下級武士、福澤諭吉は「学者」として頭角を現し、先の八条目を踏まえつつ、「一身独立して一国独立す」と述べて、新しい時代の学問と社会の循環、人の能力形成のための学校経営や社会改革を提唱した。その際、「女大学」を批判し新しい女子教育も提唱した。また、明治政府が1872(明治5)年に出した、「学事に関する仰被出書」も、自分自身のために、男も女も士族も平民もすべての人が学問をすべきで、そうしてこそ危機になる日本の独立も達成できると述べていた。そして、士農工商、君臣、長幼、男女という分断された職分に加えて、「国民の職分」「人民の職分」「政府の職分」という概念を提出し、個々人のエゴイズムの発露としての統治機構を作り出すことの大切さも強調した。

(2) 大日本帝国憲法、教育勅語によるエゴイズム

および社会改革の否定と夏目漱石「私の個人主義」

しかしながら、1889年の大日本帝国憲法と翌90年の教育勅語は、「大日本帝国ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」などと述べて、エゴイズムを正面から否定した。これによって、社会が一部特権の人々のためのものとなり、エゴイズムが再び内攻することとなった。

しかし、商品経済社会の発展は契約社会化やリテラシー社会化を促進しない訳には行かないので、その後

もエゴイズムや個人主義はしばしば社会問題となった。夏目漱石は、「私の個人主義」という講演で、「自己本位」「自我本位」という言葉に出会って、自分なりの英文学研究に目ざめ、さらに小説を書くことによってそれを日本に広めることを決意したと述べた。その際、「自己本位」「自我本位」というのは、自分だけでなく、全ての人の「自己本位」「自我本位」を尊重し、社会のお金の使い方もそのようにすることが大事だと強調した。

その後も様々な揺り戻しがあったが、下村湖人の「自覚服従」論など多様な形で、エゴイズムとソシオイズムとの調和論が唱えられながら、エゴイズムを正面から否定する大日本帝国憲法・教育勅語の法制度は変わらなかった。そして、大日本帝国は、北海道・琉球内国植民地、台湾・朝鮮植民地統治、満州国植民地統治、日中戦争、「大東亜共栄圏」、日米、日英、日仏、日蘭戦争という自己表現に突進して、1945年8月に敗戦を迎えた。

(3) 日本国、日本国憲法の成立と

エゴイズムの社会的開放

第二次世界大戦後に一連の法改正が行われ、農地改革を基礎とする行動経済成長が進み、日本社会は商品経済社会、契約社会、リテラシー社会となった。それによって、エゴイズムの社会的開放が、個々の人々にとって、また、社会全体にとっても喫緊の課題となってきた。それは同時に、韓国、台湾、香港、シンガポール、中国、タイ、インドネシア、フィリピン、ベトナムなどにとっても重要な課題となっている。

しかし、日本においては少なくとも二つの障害があることによって、社会的病理が生まれている。1つは、法改正はされたものの、江戸時代以来続くエゴイズムを否定する「分」「職分」「分限」が依然として社空きに強い影響力を与え、福沢のいう「国民の職分」「人民の職分」「政府の職分」が定着していないことである。

もう1つは、戦後日本という国家がアメリカに軍事的、外交的、経済的に従属し、それを深める政策が採られることによって、ゆがんだナショナリズムが払拭できていないということである。それは、一方では「無気力」「無力感」として現れ、他方では、近隣アジア諸国に対する侮蔑的言辞、ヘイトスピーチとしても現れている。

ただ、戦後の人々の営みを通して、社会的に開放されたエゴイズムは着実に展開している。例えば、昨年度夏の解釈改憲「安保法制」に対する立憲主義からの批判。「保育園落ちた、日本死ね」「保育園落ちたの私だ」「オリンピックで外国人デザイナーに払う金があるんだったら、保育園作れ」「保育園落ちた、私活躍できない」という概念、子どもが生みにくく、育てにくい社会への批判。福島第一原発の過酷事故の真相究明や廃炉の目処が立たないままに、原発再稼働に邁進する現

政府に対する、福島を含む各地での住民提訴、18歳選挙権施行に伴って一部の教育委員会が示している、高校生の政治活動制限への批判など、枚挙に暇がない。そしてそこには、音楽、ダンス、インターネット、映像、書道、俳句など様々な自己表現活動の展開もある。それらはまた、国際的なエゴイズム、ソシオイズムの新しい展開、新しい社会を求める動きと繋がっている。アメリカでの大統領予備選挙における格差社会批判、台湾や香港での若者の社会的表現、中国での強権的統治への批判、スペインのカタルーニャ地方やイギリスのスコットランド独立運動などなどである。

5. 自己表現の種類

エゴイズムを社会的に開放していく上で欠かせないのが、自己表現である。自己表現は、個人的な仕草から社会の仕組みの改善、地球の保全や再生まで、重層的なものである。

(1) 仕草

自己表現の第一は仕草である。仕草とは、身体を使って自分の感情や意思を自分自身に向かって、また、他者に向かって表現するものである。仕草の第一は、哺乳にかかわるものである。生まれたての赤ん坊がDNAに組み込まれたプログラムによって、母親の乳房や哺乳瓶の乳首に吸い付いて乳を飲む行為を基盤として、空腹時に泣いたり、目でサインを送ったりする。また、顔の筋肉を自分の意思で動かせるようになると、相手の反応に対応しながら、笑ったり、イヤイヤをしたり、怒ったりする。またそこから進んで、喜びや感謝、要求や受け入れ、拒絶などを、首や手足の動作で表現したりするようになる。こうした身体的な表現は、成長に従って、目と口や手足の動作を組み合わせたりするなど、より複雑になる。

これらの至極個別的な自己表現も、全て、社会的な関係つまり人との関係で生じる。自分が身体表現することに対して、周囲の人々が積極的あるいは消極的に反応することによって、子どもも若者も、大人も年寄りも、自分の表現を調整する。あるときにはさらに積極的に、またあるときには、消極的になる。その意味では、仕草もまた社会的なものである。だから、仕草という身体的自己表現を豊かにするには、周囲の人々が多様で積極的な仕草の例を示し、仕草を磨き合う関係性が重要である。言い換えれば、仕草というエゴイズムの発露は、同時に仕草の社会関係という「社会・共同体主義」の中で調整されるものである。そして、ある人の仕草がそれに共感する人々を増やすとき、社会・共同体主義という文化が変容して、新たなファッション＝流行、新たな文化を生み出していく。

(2) 描写とデザイン

仕草というものが、身体で直接的に表現するのに対して、様々な道具を使った自己表現が、描写とデザインである。その母体の1つは、神事、祀り、祭りである。人々は自分たち自身が自然の一部であり、自然の中で生きてきて、自然のシステムの枠を、基本的には越えることはできない。そこで、自然の中の様々なことを観察し、描写することを通じて、共有してきた。風や雷、川や海の波の音、獣や鳥、虫たちの唸り声やさえずり羽音などを真似て音楽を作り出し、自然に対する畏怖と尊敬、恵みへの感謝、人々の間での共感を示してきた。自然の様子、狩りや釣り、収穫や農作業、男女のつきあいなどふくめた人間の暮らしの営みを取り込んだ身体表現としての踊り。コトバで表現する歌や物語、祝詞、讃美歌もまた、描写という自己表現の一種である。文字の発明と共に、それらの一部は、詩や小説、日誌、日記などとして「文学」を生み出した。そして、これらを総合したものが、芝居、演劇、能楽、歌舞伎、ミュージカル、オペラである。

描写は、生活用品や居住等の空間の設計にも及ぶ。石器や土器などの生活用品に自分たちの生活の様子を線描したり、石や土、木などを使ってトーテムや「ビーナス」を作ったりする。太陽や星、人や獣や魚を象った彫刻は、神殿、寺院、住宅、共用施設などの装飾にも使われる。そして、京都や北京、ソウルや江戸の町がそうであるように、宇宙の根源的エネルギーとされる「気」や日光、水や風の流れを中心とした考え方、宇宙理解としての「風水」に基づく町づくりなど、都市空間の設計、デザインにも及ぶ。その際、太陽や木々の緑、空の色、土の色などの色彩も重要な意味をもつ。それは自然に囲まれた快適空間の中での、生活の質の希求の反映でもある。

これらの自己表現には技と知識と智慧が欠かせない。技とは、身体や道具を使って、自分の目的に沿って、物事を修正したり創り出したりするための行為である。知識とは、同様の行為を行ってきた無数の人々の経験に基づいて、物事の因果関係や時間的変遷などを言語的に表現したもので、技の修得、継承や発展を支えるものである。そして智慧とは、具体的な問題状況において問題解決の設定やその解決のために、技と技、知識と知識、技と知識を組み合わせ、具体的に実行可能な処方箋を作る能力である。そしてこれらを整理したもので、技術学、個別諸科学、哲学、文学と言われるものである。そしてこれらの学問もまた、描写とデザインという自己表現の一形態である。

(3) 仕事、産業、職業

このように人間が自己表現を社会的に展開してきたのは、人間が仕事をする動物になったからである。仕事とは、自分の身体や道具を使って、物事を自分や他

の人々にとって好ましい方向に改編する作業である。従って、仕事の目的は、何よりも社会貢献であるが、それは、素材、道具や装置、技能を伴う仕事の主体、共に仕事を行う人々によって成り立つ。それと同時に、仕事を通して自分が他の人々の役に立つことを確認する、自己実現、自己表現の一形態である。

仕事が生業としても成立するとき、それは近代的な意味での職業となる。だから職業生活もまた、自己表現の一形態である。

仕事には、その特徴に注目するときに、人を生み育て、自らも再生産をする仕事と、物を作り再生産をする仕事、さらには、その両者を可能とする社会システムを管理・維持し発展させる、「共同事務」の仕事がある。これらが生業として成立するとき、それは産業を構成する。産業も含めて、仕事は自分自身、自分と他の人々、自分と自然とのコミュニケーションであり、自己表現でもある。

だから、自己表現は、これら、仕事、職業、産業としても展開される必要がある。この部分を欠くとき、自己表現は不安定なものとなり、この部分が充実していることによって、自己表現はより安定したものとなる。

(4) あそび

仕事が、他の人に役立つことを特徴としているのに対して、楽しさを特徴としているのが遊びという自己表現である。同じように絵をかくても、目的意識をもって描き、それが人の役に立てば仕事になるが、人の役には立たなくても遊びとして絵を描くことは成立する。遊びは結果には責任を負わない「気楽」で、「気晴らし」を目的とするものなので、失敗を恐れずに大胆に取り組むことができる。遊びによって大胆に楽しみ冒険をして、仕事によってそれを着実に成果にしていけることが、バランスのとれた自己表現の基盤となる。

(5) 祈り

「人事を尽くして天命を待つ」という言葉がある。人として精いっぱいのことをやって、その結果は神妙に受ける、という意味である。このように、人はすべてのことを自分で決定できないので、「祈り」という行為を行う。死後の世界、一所懸命取り組んだことの結果、災害や病気を避けることなどについて、人間よりも大きな力をもつ存在に祈る。この祈りもまた、自己表現の一種である。祈りの対象が唯一神とされる場合もあるし、日本、中国、韓国・朝鮮、インドなどのように多様な神を対象としていることもある。祈りは、音楽、踊り、衣装、装飾、数珠や鐘、聖水などの道具やそのための場など、他の人の自己表現の産物を活用して行われることも多い。

（６）人間関係作り

仕事も遊びも祈りも、アートや学問も、一人で行うものであるとともに他の人々と共に、あるいは制度的、規範的な場において行われる。だから、そこでは、様々な人々と良好な関係を築くことが欠かせない。表情やコトバや衣装や仕草、プレゼンテーション、料理などによって自分を表現し相手との接点を探り、創り、共感関係を取り結んでいく。そしてそれはまた、一緒に働き、遊び、語り、作ることを通じて強化される。

（７）組織、ネットワーク

人間関係がより安定するために、人は組織やネットワークを作る。組織には志を同じくする人が寄り合うゲゼルシャフト、ソサエティー、会社型のものと、たまたま血縁や地縁等でつながりあう、ゲマインシャフト、地域共同体型のものがある。前者は契約の世界であり、後者は非契約の世界である。

（８）社会制度

組織やネットワークの持続性を高めようとするときに、法律や行政システムなどの社会制度が作られる。社会制度は一定の地域で一定の時代に作られるので、現実とずれていくこともある。その場合には、社会制度やその運用についての修正や作り変えが必要になる。これもまた、自己表現の一種である。なぜならば、私的な自己表現も時として組織やネットワーク、社会制度やその運用に、支えられたり、妨げられたりすることがあるからである。だから、より現実的で実際の状況に合致する社会制度になるように努めるによって、より自由で闊達な私的な次元での自己表現を確保することも大切である。

（９）地球の保全

産業革命以後、人間は地球の自然システムの能力の限界を超えて、地球に負荷をかけてきた。大気、水の汚染やある種の食品添加物等は人間の存立基盤そのものを脅かしているのが、人間が力を合わせて地球を保全していくことは、人間の自己表現にとって欠かせないものである。とくに、核兵器の使用と原子力発電所の事故は繰り返してはならないことである。そのためには、戦争をなくすための、世界における富の公平な分配システムや、水力、太陽光、地熱、バイオ、風力などの持続可能なエネルギーシステムを作ることも必要である。それは、避けて通れない、人間としての自己表現である。実際そこに焦点をあてて、音楽や絵画、芝居、彫刻、映像、ドキュメンタリーや詩、社会システムの改善など、多くの人が個人の次元と人のつながりの次元で、多様な自己表現を行っている。

６．エゴイズムを成立させる心理的、

認識論的条件とキャリアデザイン、生涯学習

最初に述べた、エゴイズムと社会関係とのほざまで悩んでいる人の問題は、エゴイズムについての歴史を踏まえつつ、以上のべたような多様な自己表現を通して解決されていくものである。

これを行うためには、エゴイズムとソシオイズム＝「社会・共同体主義」との両立が成り立つための、人間の能力育成、自己教育の仕組みを作ることが大事である。それは、学校の再編成や、家庭、地域、学校、職場、企業社会、地方自治体、国家、国際社会・グローバルコミュニティに渡るものである。それは取りも直さず、現代のキャリアデザインと社会教育、生涯学習・教育の課題である。